

外国人支援に携わるソーシャルワーカーの実践から考える

坂間 治子

(公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会女性の家 HELP)

Discussion on the Practice of Social Workers Involved in Supporting Non-Japanese

Haruko SAKAMA

皆さん、こんにちは。公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会が運営しておりますシェルター、女性の家 HELP に勤務しております坂間治子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。古い話ですが、日本女子大学といえば、一番ケ瀬康子先生。学生時代にその論文をゼミでかじった一人として、今日このキャンパスで、何十年か携わってきた経験について皆さんとシェアする機会を与えられましたこと、大変うれしく思っております。今日の私の役どころは、現場で実際に外国籍の方と日常的に関わっている中で、文化だとか言葉だとか、いったいどのように現場で立ち現れてくるのかについて皆さんに具体的にイメージしていただけるようにお話することと思っております。

文化が違うというふうに言われます。どのように違うのでしょうか。具体的にどのように立ち現れてくるのでしょうか。分かりやすい違い、それと、分かりにくい違いがあります。まず、分かりやすい違いから幾つかご紹介します。ある朝、私が出勤したら、施設利用者であるフィリピン人の A さんが、具合が悪いから今日は病院に行きたいとおっしゃいました。それで、総合病院に行きましょう、私一緒に行きますから、出かける準備ができたなら一緒に行きましょうと言いました。総合病院の初診受付は大体 11 時ぐらいまでです。それまでに行けばその日のうちに診てもらえるか

ら、時間も十分あるからと、A さんを待っております。「出かける準備をしたら」と言った私の言葉の中身は、お着替えをして病院に行く支度ができたら事務所のドアをノックしてほしいということでした。何分待っても来ないので、あれ？、A さんどうしてるの？と言ったら、他のスタッフが、「A さんはシャワーを浴びているよ」と言うのです。え？なんで今？シャワーって何分なの？11 時までに間に合うの、間に合わないの？と思うわけです。フィリピンとか中南米の方は、基本的に、朝お出かけ前にシャワーをするのが生活習慣だと知っておりました。けれども、まさか具合が悪くて病院に行く前にシャワー浴びないでしようと思っていたのです。ところが、彼女たちに言わせると、病院に行くときであってもシャワーは浴びるのです。なぜならドクターに診てもらうのですから。その日、病院に着いたのは 11 時 2 分。受付時間を僅かに過ぎていて受診かなわず、翌日出直しました。

二つ目の例は、「畳の上はサンダル NG だよ」です。これは、アフリカ出身の母子とのやりとりです。私の勤務先はインターナショナルチームで、スタッフにもいろいろな国籍の人がいます。だから言語対応も、そのスタッフが話せる言語だったら大体母語で対応するというのが基本的な考え方なので、スタッフができる言語についてはスタッフが外国語で対話するのです。ですから、勤務先

にいる間は、彼女の第2言語を話すことが十分できたので、言語上の問題は全くなかったのです。けれども、その母子が引っ越しをする次の施設は日本人スタッフしかいない施設なのですね。で、その方のお子さん（幼児）ですが内履きのままお部屋にデデデデデデって上がって行ったのです。畳のお部屋に、デデデデデ。その時、あーっ、なんで靴のまま畳に上がるかなーと思うわけです。同じことはそれまで何回も経験しておりました。そのたびに、あーっ、（できればやめてほしい）と思っていました。でも、緊急一時保護という時期、支援の本当に入り口の段階では、一時避難の時の生活状況の記憶は本当にまだ生々しく残っておりますし、今後の生活の見通しは全然立っておらず、もう悩ましいことばかりなのです。そういったこともスタッフは心得ておりますので、あーっと思ってもぐっとこらえるわけです。今それを言う段階かと。本当は、畳の上は、別にその方たちだけではなくて、次の方も、その次の方もお使いになるわけですから、きれいなままのお部屋にはしておきたいのです。だけどぐっとこらえて、まあしょうがないな、今言わなくてもいいかなとずっと黙ってきた。だけれども、外履きと内履きをどこでどのように履き替えるかはお国によって考え方がそれぞれ違います。日本は家の中では靴を脱ぐ。畳のお部屋にはスリッパを脱いで上がる。それは普通ですよ。それが私たちの共有する行動様式、文化というものです。けれども、アフリカ出身の人もそうですから聞かれます。そうではない。だからお子さんたちもダダダダと畳の上に内履きで上がるわけです。でも、私の勤務先でそれは受け入れられても、他の施設で受け入れられるかどうか分かりません。下手すると、「○○さん、しつけのできないお母さんね」とか低い評価につながる可能性もあります。それは望むところではありません。なぜならその方は子どもの面倒をよく見る、しつけもちゃんとするお母さんな

のですから。だから、彼女が引っ越しして困らないように、その日はあえて言いました。「これからあなたは引っ越しだから言うけど、畳の上はサンダルはNGだよ。大人もそうだし、子どももそうだよ。」彼女は、うんうんとうなずいていらっしゃいました。今の例は大体分かりやすい違いですね。

分りにくい違いというのもあります。ここでは子どもたちのことを中心にお話したいと思います。「Oh！坊主、元気いいね」のエピソードについてです。日系南米人のママと、お姉ちゃんと3歳の男の子というファミリーです。3歳の男の子は、どうしたことか日本人の子どもに比べて3倍ぐらいエネルギーを持っている。どこへ行ってもよく動いて、お母さんとお姉ちゃんはその子がどこかでいたずらをするんじゃないか、あれ持ってくるんじゃないか、いわゆる他の人に迷惑かけるのではないかと気の休まる暇がないのです。その日は、他の外国籍ママと、ファミリーたちと一緒に、日帰りの移動式遊園地を開いてくれるという外資系の企業の主催行事がありまして、そこに出かけていきました。子どもたちは、もちろん大興奮です。3歳の男の子も例外なく、受付に向かってダダダダと元気に走っていく。そこに待ち受けていたのは、体重120キロぐらいの白人系の外資系企業の社員の方。もう本当に大きい方ですね。彼は、ダーっと走ってくる男の子を見るなり、満面の笑顔で「Oh！坊主、元気いいね」と日本語で言ったのです。これを聞いたときは、私はもう肩の力がへらへらって抜けていきまして、ここではこの子は本当に一人の3歳の男の子として迎え入れてもらったんだと思いました。

ちょろちょろ動くわちゃわちゃしてる外国人の子ではなくて、もう、ただ元気のいい3歳の子。来たね。ウエルカム。さあ食べなさい。さあ遊ばなさい。1日楽しんでください。そのために今私はここにいるのですからというウエルカムをされ

たのです。もう本当にうれしかったです。

2つ目のエピソードは、「ほく、この音楽、わからない」です。外国籍ママと子どもたちの中には、DVが原因でシェルターに避難してきた方がいます。その方たちは、しばらくすると中長期滞在型の施設にお引っ越しをしていきます。ですが、外国籍の方の場合は、DV被害から受けた心理的な影響について知るチャンスが日本の方に比べて少ないんです。それをそのまま放っておくと、長い目で見て、ファミリーが安定して生活していくことの阻害要因になるのではないかと、DVの被害を受けたなら、それが自分の心や体にどんな影響があるのか、自分だけじゃなくて、子どもたちにどんな影響があるのかということについて知ってもらいたいと思うのです。それで、私たちシェルタースタッフは、みんなで外国籍ママたちにそのことを伝えるために、ママたちを対象にしたプログラムを作りました。みなさんお子さん連れですから、その間子どもたちが困らないようにと子どもたちの保育プログラムを裏番組で作りました。プログラム内容としては、ミュージックがいいねと話しましたが、いつもシェルターでお願いしているセラピストさんはその日たまたまご都合が悪くて、別のグループをお願いをしました。参加した子どもたちは、未就学児も学童もいて、年齢もばらばらだけど、国籍も日本国籍の子やさまざまな外国籍の子も混ざっています。何曲目かに『ソーラン節』がかかりました。（「ヤーレン ソーラン ソーラン ソーラン」ですね）。そうしたら、それまで部屋の中央にいた子たちが何人か壁のところにべたって背中をくっ付けて、なんだかぼつねんとしているのです。そういう姿はシェルターにいたときに見たことなかったの、あれ？と思いました。よく見てみたら、外国籍の子どもばかり。どうしたの？と声をかけたら、小学校2年生位の子が言いました。「ほく、この音楽、わからない」。その時に初めて、これは日本の音楽なんだ。日本

的な文化の中に存在している、音楽としてはユニバーサルでない音楽。民謡ですから当然ですけど、ユニバーサルではないと気づきました。ここにいるこの子たちは、いつも保育園で、学校で、こういう思いをしているんだ。悪意のある人は誰もいないのです。良かれと思って子どもたちのためにプログラムを立ててくれたグループです。けれども、その中で「ほく、この音楽、わからない」という経験をする子どもがでてくる。この辺は分かりにくい違いです。次行きます。

地域で自分の家で安定して生活している時と、暴力やそれ以外のことで、自分の家を出て緊急一時保護シェルターに避難をしなければならない時、場合によっては命からがら逃げる、大事な物と子どもだけ連れて逃げる緊急の時があります。その時には普段とは違うことがいろいろ起こります。まず、緊急時には言語能力が変化するということです。支援者の方からお話します。シェルターに入る時には、相談者は、大体、お住まいの自治体でシェルターを案内してくれる相談窓口相談に行きます。その時に、そこにいる相談員さんは必ずしも外国籍の方の相談に乗るのに慣れているとは限りません。担当の相談地域にどのぐらい外国籍の人が住んでいるかや、相談員さんの勤務年数などによっても違うかもしれません。それで、相談員さんは思います。「外国籍の方が相談に来た、外国籍の方の相談に対応したことないわ、どうしよう。私にはできないんじゃないかしら、難しいっていうもの。早く帰ってくれればいいのに。」人間ですから、パニックになるのです。社会福祉専門職にそんなことあり得ないと思う方がいらっしゃるかもしれないですけど、あり得るのです。場合によっては、相談者を追い返してしまいます。窓口から見えなくなれば支援者は安定した状況に戻れますから、早く安定した状況に戻りたいと思って、つい冷たく追い返してしまう。

また、自然災害などの時のテレビのアナウン

サーを想定していただけると分かりやすいと思いますが、緊急時には、話す回転、話す速度というのがとても速くなります。話す量がとても増えることもあり得ます。この相談者は大変な思いしているかもしれないからと少し速度を落としたり、少し声色を柔らかくして話したり、大抵の相談員さんは気を付けてなさると思いますけれども、なにせ相談員さんがパニックになっていたら、そんな心の余裕はない。ダーっとまくし立てたりします。

一方、相談に行った外国籍の方は、もう人生の一大事です。日本の役所など行ったこともないし、それまで「お前外国籍だから何もできない」とか、「日本人はお前の言うことなんて信じない」とか言われているのですよね。勇気を振り絞って相談窓口に行ったものの何を言っているのか分かりません。緊急時には、言語能力、特に外国語の言語能力は下がるのです。自分の言葉で話すならまだ言えますけれども、それを日本語に通訳してくれる人は、大体そこにはいないのです。そして、慣れない日本語で話そうと努力しても、パニックになった相談員さんが次々にまくし立てる質問に混乱して、「もう、今日は帰ります」と言って帰ったりする。いろんなことが起こります。

運良く相談窓口をクリアしてシェルターに辿り着いた場合、日本の方はあまりないのですが、外国籍の方からよく言われるのは、「礼拝に行きたい」ということです。カトリックの方は「ミサに行きたい」、プロテスタントの方は「教会に行きたい」とおっしゃいます。当然のことだと思います。命からがら逃げてくるわけです。海外で、家族もお友達も今そばにはいない。今スマホとかですぐ誰にでもつながれる時代ですが、シェルターではスマホの使用を制限される場合もあります。その中で、これから私はいったいどうなるのか、子どもを連れて養っていけるのか、誰に、何に頼るべきかという思いはとても高まります。仏

教、イスラム教、キリスト教とかいろいろありますけれども、その人が何かいゆる信仰があるなら、神に頼る時、それはまさしくシェルターに入っている時ではないかと思います。そうした霊的ニードが高まるのは、緊急時にはごくごく自然なことだと思います。ところが、ここはすぐくもどかしいところでもあるのですが、お寺、教会、モスクというのはエスニック・コミュニティの玄関なのです。いろんな情報交換をする場所であり、あなた最近どうしてるの？と安否確認をする場所でもあります。もしそういうところへ行ったならば、「〇〇さん、久しぶり、どうしていたの？」「実はかくかく〜」という話になる。居場所が知られるリスクが高まる。「そういえばこの間〇〇さんをあそこで見たよ。」本当は居場所を隠さなくちゃいけない時期であるにもかかわらず、知られるリスクが高くなるのです。そうすると、しばらくそこには行かないでくださいと言うことがあります。

次の例は、コーランです。この方は大変熱心なムスリムで、シェルターにいらっしゃる間、お祈りを本当に毎日毎日していました。ところが、ある事故で、彼女の持っていたとても大切な物、書類、お祈りのお洋服、あと、コーランなどなくなってしまい、その方は、ものすごく泣き、嘆きました。コーランは、お祈りを捧げるすべであり、お祈りのパートナーです。どうしたらよいか悩みましたが、とても異例なんですけど、私どもの勤務先から彼女にコーランをプレゼントしました。勤務先はキリスト教主義の施設なんですけど、ムスリムのスタッフに頼んで買ってきてもらいました。それを差し上げたときのその方の喜びようは半端ではなかったです。文字どおり霊的に枯渇した状態が続いていたのだと思います。その中で、いわゆる命の水を得て、これで自分は生きていける。これで大丈夫だと喜ぶ姿を見ました。そんなに喜んでもらえるとは正直思っていなかったのですが、私もびっくりしました。それだけその方にとって

神との関係というものが生きる源泉であったということに気付きました。

忘れられない言葉について、少しだけお話しします。両方とも支援者の言葉です。一つ目は、「言葉の問題なのか、文化の違いなのか、障害なのか、病気なのか、性格なのか、どれが原因なのかが分からないのよ。」というベテラン相談員さんのコメントです。外国籍ということ自体が年齢、障害や疾病の有無、人種、出自などと同じ一つの属性にすぎないという理解をしているのだと思いました。その上で、今、目の前にいるこの人(外国籍相談者)が置かれた状況をきちんとアセスメントしたいという強い思いを持ってこのコメントを仰ったのだと思いました。

二つ目、この方は外国籍支援ビギナーマークの方です。施設の利用者が、とある入所施設への申し込みを断られたのです。「断られた理由は何ですか」と私が聞いたらその時に返ってきたのが「外国籍だから～」という言葉でした。耳を疑いました。「外国籍だから～」何でしょう。はっきり言語化されなかった、外国籍だから～の後半部分にはいったいどのような言葉が入るのでしょうか。「外国籍だから～」と言ったのは施設職員です。同じ施設職員として、私は相当強い思いを抱きました。それを私に伝えたのも福祉関係者です。それを伝えたことについても相当強い思いを

抱きました。だけだと思います。こうしたコメントは、何か特別なことではなく、時々あるのです。私の中にも、時々あります。

最後です。私の勤務先で、ゆるーいプログラムをやっています。それは、言語をそんなに必要としない。参加するかしないかとか、どのぐらい参加するかを制約されない、あと、自分を自由に表現していい、年齢・障害・疾患を問わないプログラムです。具体的には、ヨガ、ミュージックセラピー、フラワーアレンジメント、あと、人気なのがアートセラピーです。

また、私たちが目指しているところについてです。家族のために食事を作り、仕事をし、時々子どもの誕生日にはみんなでパースデーケーキを食べ、季節の行事を楽しみ、過去のことを思い出し、今の自分のことも考え、将来のことをプランする。こういう時間の取れる生活ですね。

一番最初は、利用者さんがこういうふうになるよう目指すことを示すために作ったイラストですけれども、様々なところでお話をしていくにつれ、これは私たち支援者が目指すべき生活でもあるかなと思っています。利用者であれ、支援者であれ、国籍に関係なく、人として目指していく健康で文化的な最低限度の生活とはこういうことなのではないかなと思います。すいません、長くなりました。ご静聴ありがとうございました。